

2023 年 3 月研究会（同志社を語る会）

青森県風間浦村・同志社交流 30 年を語る

報告者（報告順、肩書は研究会当時のもの）

富岡 宏	風間浦村長
越膳 泰彦	前風間浦村教育長
村上 純一	風間浦村教育長
石川 禎大	風間浦中学校校長
平田 和彦	千葉県立中央博物館研究員、風間浦村ふるさと大使
駒嶺 鍊	同志社大学学生
本井 康博	元同志社大学神学部教授
司会：竹山 幸男	同志社中学校・高等学校副校長

竹山：それでは、時間になりましたので、始めさせていただければと思います。今日の研究会のテーマは本井先生の発案で、「風間浦村と同志社の交流 30 年を語る」ということで、風間浦村の方々にも参加していただき、オンラインとこの会場の 2 会場で開催させていただければと思います。どうぞよろしくお願いいたします。司会をさせていただくのは、同志社中学校・高等学校副校長の竹山です。それでは早速ですが、お忙しい中、参加していただいています風間浦村の方々から話題提供をしていただければと思います。まず、風間浦村の富岡村長からご挨拶をよろしくお願いいたします。

富岡：青森県風間浦村長の富岡でございます。

本日は、同志社を語る会にお招きいただきありがとうございます。

そして、今回は、同志社と風間浦村の交流 30 周年をテーマにいただき、大変光栄に思っております。

同志社と風間浦村との交流は、2022 年 30 周年を迎えることができました。

昨年 の 記念式典には、八田英二総長・理事長先生をはじめ、多くの関係者のご臨席、そして同志社大学 OB でシンガーソングライターの伊藤誠さん

のコンサート、そして、本日の同志社を語る会を企画下さった本井先生にご講演をいただきました。本当にありがとうございました。先生のご講演の演題は、「ルビコン川を渡る新島襄」でした。津軽海峡をルビコン川にたとえ、新島先生がまさに後戻りのできない道へと歩み出す、決断をした地であるとお話されました。

新島先生は、1864年4月、風間浦村の下風呂温泉で疲れた体を癒しながら、まさに、最後の決断をなされたのでしょう。帰国後、先生は同志社を創立され、そして、八重さんと結婚されました。八重さんは会津藩出身で、風間浦村の初代から3代までの村長もまた会津藩の方でありました。これもまた、何か導かれるものがあつたのではと思っています。先生が、当村に寄港されてからおよそ160年が経ちますが、こうして、新島襄寄港の地碑が建立され、そして、同志社と風間浦村が交流30周年を迎えていることは、こうした多くのご縁の賜物であると思っています。

私も、縁があつて、寄港の地碑建立と交流事業の始まりに、当時担当課長でありました越膳泰彦前教育長のもと担当職員としてたずさわらせていただきました。

その後、中学2年生の体験入学、留学生との交流等、交流の輪が広がり、2022年4月には、初めて同志社大学に風間浦中学の卒業生が入学することができました。

何より、私も今、この村の村長として、同志社の皆様と親しく交流をさせていただいていることに、ご縁を感じているところでもあり、このご縁を大事に、今後も交流を重ねてまいりたいと思っております。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

結びに、学校法人同志社の益々のご隆盛と、交流の発展・関係各位のご健勝とご多幸をご祈念申し上げ、あいさつとさせていただきます。

ありがとうございました。

竹山：富岡村長、ご挨拶ありがとうございました。それでは次に、富岡村長のお話の中に出てきました越膳前教育長からお話をいただきたいと思います。

越膳：こんにちは越膳泰彦です。

2022 年の 10 月 30 日に開催された「新島襄寄港の地碑」建立 30 周年記念イベントにおいて、八田英二総長から感謝状をいただきました。

改めて感謝したいと思っています。

資料として、『週刊教育資料』に 4 週にわたって「変わる教育委員会」として掲載されたものと、イベントレポートを配布させていただきました。

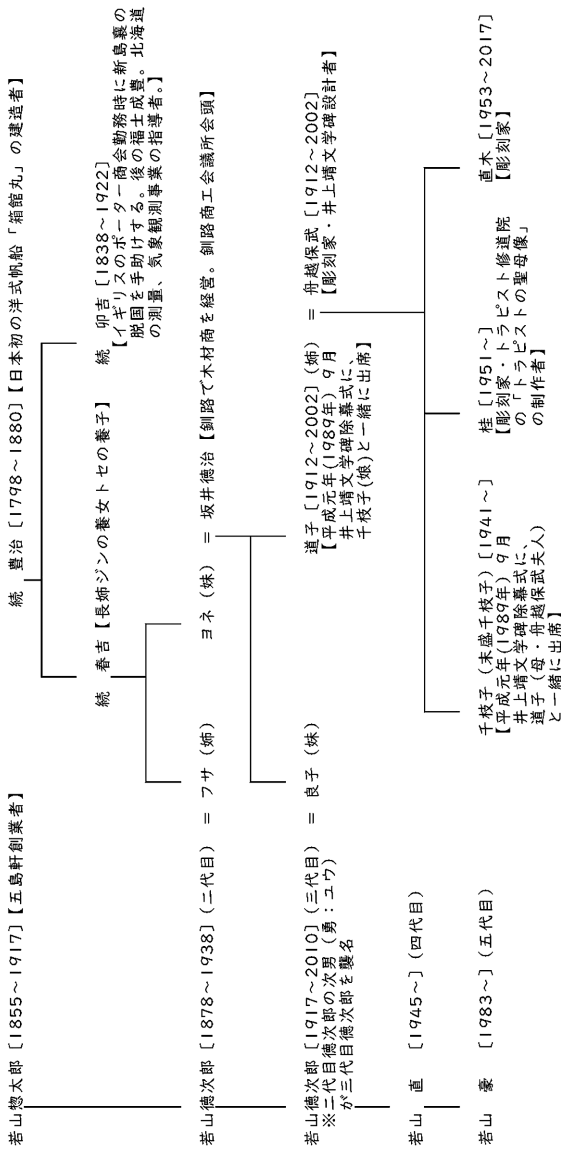
『週刊教育資料』の担当者も同志社大学卒業生で、さすがに同志社の人材は豊富で、まさに「同志社山脈」だと思いました。彼は「原稿を読んで涙が出てきた」とおっしゃっていました。今日は貴重な時間を頂きましたので、新島襄、同志社、風間浦村、そして井上靖について、特に函館市の福士成豊（卯之吉）についてお話したいと思っています。

ご案内通り、新島七五三太は箱館で武田塾いわゆる「諸術調所」へ行って、武田^{あや}斐三郎に面会を求めましたがあいにく留守（江戸滞在）で、塾頭の菅沼精一郎からロシア正教会のニコライ神父を紹介されました。

新島七五三太には仕事と食事そして住居が与えられました。函館ロシア正教会は地元ではガンガン寺と呼ばれていますが、そこで箱館神明社の宮司沢辺琢磨（土佐藩の出身で、幼名は山本数馬と言ひ、坂本龍馬の親類）と知り合いになり、イギリス人アレキサンダー・ポーター商会で通訳をしていた福士卯之吉（成豊）と運命の出会いをします。

図 1（次ページ）をご覧ください。

若山家の家系図がありますが、先代の四代目若山直社長に手紙を書いて、家系図の直しと、これを公開していいかお聞きしました。2014 年 5 月 24 日（土）15 時 56 分にメールをいただきました。「舟越さんの縁で五島軒はいろいろ紹介されていますので、風間浦村が、名前を出すのは問題ありません。家系図などを掲載した『五島軒 120 年史』を週明けに送ります」とありました。函館市の五島軒は、レストランを経営し、パン、ケーキ、カレー製品の製造・販売をする有名な企業です。レストラン「雪河亭」は、船山馨の小説「蘆火野」の舞台として、またレトルトカレーは「函館カレー」が有名です。私は、缶詰の「五島軒カレー」が好きです。2021 年会長が交代になり、四代目社長直氏は会長に、長男の豪氏が五代目に就任しました。



※ 五島英吉（ゴシマ エイキチ）【本名（宋近治・ソウ キンジ）】 戊辰戦争に巻き込まれて箱館へ渡り、榎本武揚や土方歳三と共に五稜郭で戦い敗れ、残党狩りを逃れてハリストス正教会に匿われる。10年間ロシア料理とパンの作り方を学び、明治12年に初代料理長となる。

図1 若山家（函館五島軒創業）家系図

どうして、五島軒かと言いますと図 1 の左下に五島英吉^{ごしまえいきち}、宋近治^{そうきんじ}は五島藩（五島列島福江）の百石取りの武士の出で、長崎の唐通辞（中国語の通訳）とあります。

五島英吉は戊辰戦争に巻き込まれて箱館へ渡り、榎本武揚や土方歳三と共に五稜郭で戦って敗れ、残党狩りを逃れて、ハリストス正教会に匿われました。

ここで 10 年間ロシア料理とパンの作り方を学び、1879（明治 12）年に五島軒の初代料理長となります。

五島軒の創業家は若山家ですが、続^{つづき}家と深い関係があります。新島襄の脱国を手助けしたのは続家出身の福士成豊（卯之吉）です。1866 年 2 月 23 日、新島はアンドーバーから、福士に手紙を出しています。

これには「本当に今すぐにも会いたいものです。君の真の友達である新島七五三太」と記しています。小舟に乗せてベルリン号（アメリカ所有で、プロシア船籍）まで新島襄を運んだのは、卯之吉です。卯之吉は、日本最初の洋式商用帆船「箱館丸」製作者の続豊治の息子です。

「箱館丸」は復元されて函館港に逗留されています。続豊治はかつて高田屋嘉兵衛のもとで船大工をしていました。卯之吉は若くして福士家に養子に出されました。続家の長女のジンには子がなく、長男の七太郎の長女トセを養子に迎え、このトセに養子（春吉）を迎え、家系、続家を存続させました。8 人の子どもに恵まれ、6 番目のフサ（4 女）は若山家（二代目若山徳次郎）に嫁ぎました。フサの妹ヨネは、函館にいた坂井徳治に嫁ぎましたが、彼は釧路で木材商を経営し成功しました。ヨネと坂井徳治の娘道子は、風間浦村の井上靖文学碑の設計者である舟越保武に嫁ぎました。

また、道子の妹の良子は三代目の若山徳次郎に嫁いでいます。道子にとっては、母ヨネの姉フサと自分の妹良子と二代にわたって若山家に嫁いでいます。四代目若山直にとって、井上靖文学碑の設計者である舟越保武の子どもたちはいとこになります。碑文が井上靖で設計者が舟越保武の文学碑は全国に多くあり、有名なところでは石川近代文学館の本館左手にある「流星」の文学碑です。

石川近代文学館は旧制四高の赤レンガの校舎を利用しています。井上靖は

旧制四高の卒業生です。在学中、寝技専門の高専柔道にあげくれたそうです。井上靖が柔道にあげくれた第四高等学校武術道場「無声堂」は、犬山市の「明治村」に保存されています。オープニングセレモニーで井上靖は慟哭したそうです。一緒に練習した仲間がほとんど戦死したことにどっと溢れる感情があったに違いないと思います。今でも「無声堂」には「井上靖」の木製の名札が残っていると聞いています。この「流星」という碑文は、1988年12月7日に世田谷桜にあった井上靖邸の応接間で私の目の前で本人に朗読していただきました。応接間と書斎は、役所広司、樹木希林が出演した2012年公開の映画「わが母の記」に出ていました。この応接間と書斎は、今、旭川市の井上靖記念館にそっくりそのまま保存されています。

なぜ旭川なのかといいますと井上靖の父井上隼雄は軍医で旭川第七師団に属していて、母八重との間に長男として生まれました。

次の年には韓国に異動になっていますので1歳を超えたところで伊豆湯ヶ島に帰っています。ちなみに弘前第八師団で退職になっていますので、大学に入る前に弘前市にも来ています。

今、旭川市の井上靖記念館では企画展として「井上靖の文学碑」(展示期間2023年2月4日～5月21日)を開催しています。機会がありましたら是非ご覧になってください。

私も、同志社中高を経て、函館市にある北大水産学部を卒業し、現在、千葉県立中央博物館の研究員で海鳥研究者として活躍している平田和彦氏と一緒に、井上靖記念館で、2019年3月に企画展「井上靖『海峡』展」のギャラリートークに参加しました。

舟越保武は盛岡中学(盛岡第一高等学校)から東京美術学校(東京芸術大学彫刻科)に進んでいます。父親が熱心なカトリック信者でしたが、長男が生まれて間もなく死んだのを機に、洗礼を受けてカトリック信者になりました。舟越保武の作品では「原の城」、「病醜ぬさまいのダミアン」、長崎西坂公園にある「長崎26殉教者記念像」、釧路市幣舞橋にある「道東の四季-春」が有名ですが、十和田湖には高村光太郎の「乙女の像」が、そして田沢湖には舟越保武の「たつ子像」があります。東京美術学校の同期である佐藤忠良と戦後の彫刻界を二人で牽引しました。ちなみに1966年にフジテレビで放映され

た連続ドラマ「若者たち」に本名で出演していた佐藤オリエは、佐藤忠良の娘です。

1989 年井上靖文学碑の建立の後、井上靖邸の近所にあった舟越保武邸を訪問しました。舟越は 2 年前に脳梗塞で倒れ、右半身が不自由になったが、すぐにリハビリを開始し、2002 年死の直前まで創作を続けたそうです。私にもミニ画集にふるえる左手でサインしていただきました。姿勢もしっかりしていて、一流芸術家の鬼気迫る気配を感じることができました。

長女の千枝子が生まれたときには、敬慕、尊敬する高村光太郎の所に行つて命名してもらいましたが、『智恵子抄』の「智恵子」だと不幸になるので、「千枝子」になったそうです。

末盛千枝子は、上皇后の美智子様の友達です。平成天皇が退位し上皇になった 5 年ぐらい前にはテレビに出演していました。

実生活で末盛千枝子は大変苦勞しています。結婚から 11 年後の 42 歳の時、息子たちが 8 歳と 6 歳のころ、1983 年の夏、「夢であいましょう」や「ステージ 101」の NHK デイレクターであった夫の末盛憲彦が自宅の廊下で急に倒れ、突然死を迎えてしまいました。永六輔や中村八大に世話になったそうです。「夢で逢いましょう」からは「上を向いて歩こう」、「遠くへ行きたい」、「おさななじみ」、「こんにちは赤ちゃん」などがヒットしました。

長男の舟越桂も彫刻家で木彫なのですが、トラピスト修道院の聖母マリア像の制作者です。

1989 年井上靖夫妻、長女と妹に加えて、舟越道子と長女の末盛千枝子と一緒に井上靖文学碑除幕式に出席しました。いろいろ説明してきましたが、津軽海峡をはさんで、函館市と風間浦村にはいろいろなつながりがあるのだと思います。富士卯之吉はのちにイギリス人のブラキストンから教わり、気象観測を行いました。

住居は札幌市の北海道開拓村に保存されています。新島襄は帰国後札幌にあった富士成豊邸で避暑と療養を兼ねて滞在しています。津軽海峡は北海道と本土の動物相の分布線でブラキストンラインが引かれています。

図 2（次ページ）をご覧ください。井上靖の奥様はふみといいます。同志社女子専門学校を中退していますが、風間浦村下風呂にある「海峡いさりび

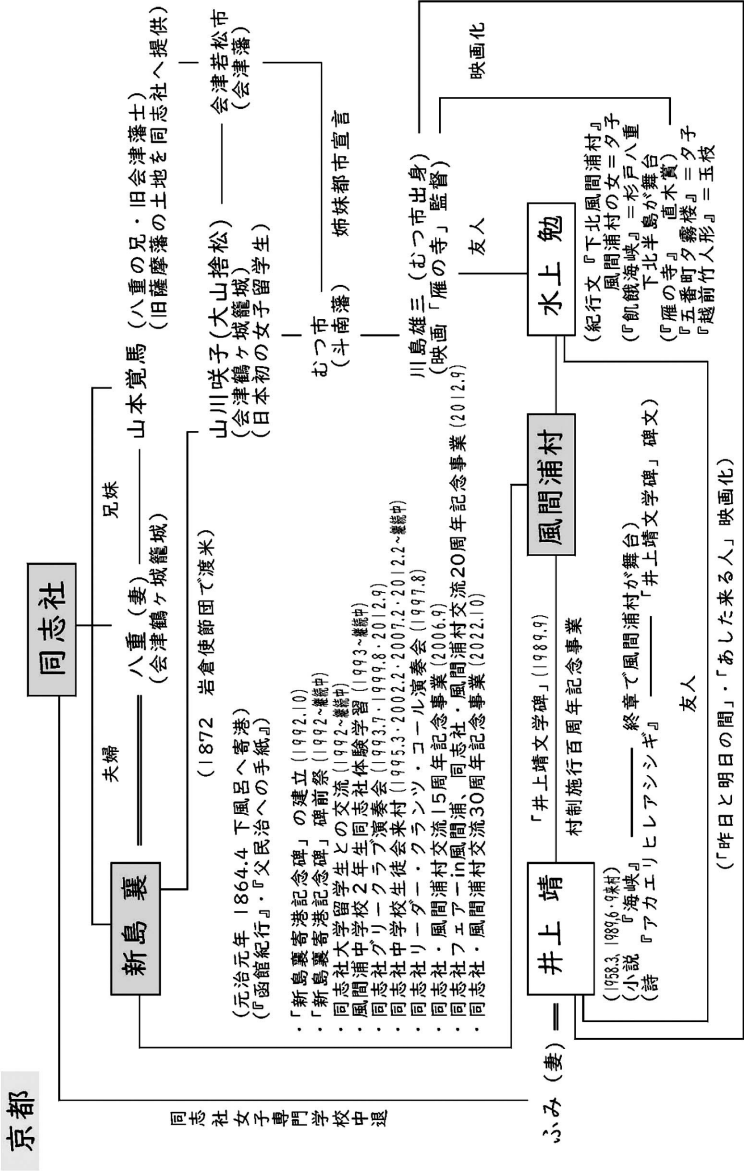


図2 京都と風間浦

公園」には夫の「井上靖文学碑」と母校の「新島襄寄港の地碑」があります。新島襄と一緒に同志社を作った山本覚馬の妹で新島襄夫人の八重は、旧会津藩出身ですが、会津落城後八重は米沢に隠遁した後に覚馬を頼って京都に行ったそうです。斗南藩は、1869 年 11 月に会津藩の松平容保の嫡男の容大に家名存続が許されて成立、1871 年 9 月に青森県に編入になり、2 万人の会津藩士のうち 1 万 7 千人が移住してきました。その後、ほとんどが帰郷しましたが、残った者は、町村長、吏員、先生として活躍しました。

例えば 1900 年中国で起きた義和団事件を制圧し、「Baron Shiba」と呼ばれ、1902 年の「日英同盟」の最高の功労者と称賛された柴五郎大将、白虎隊として活躍し、後にイエール大学に国費留学し、東京帝国大学、九州帝国大学、京都帝国大学それぞれの総長を務めた山川健次郎、さらにはその妹で岩倉使節団では日本で初的女子留学生となり、のちに「鹿鳴館の貴婦人」と呼ばれた「山川さき」こと初代陸軍大臣の大山巖夫人の大山捨松、最近では元青森県知事の北村正哉などが挙げられます。

今でも、むつ市に「斗南会津会」があり、会員交流が盛んですが、私も加入しています。私の家内の祖母が、北村元知事のいとこだそうです。私は会津とは関係ないのですが、自分の子どもたちは会津の血を引く者であるからです。会津若松市にも「新島八重顕彰会」があり、「斗南会津会」と毎年交流しています。「会津まつり」にはむつ市から毎年参加するそうで、友好都市がいくつかあるそうですが、鳴門市、伊那市、横須賀市の上席にむつ市が位置するそうです。パレードでは馬に乗ったむつ市長に「お帰りなさい」と声がかかるそうです。

それではここで終わりたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

竹山：どうもありがとうございました。同志社と風間浦の交流以前の歴史と、そしてまたその周辺の歴史についてご説明いただきました。また、30 年間にわたる交流の話などは、後ほど時間があればインタビューしたいと思います。それでは、今の風間浦村の教育長で以前は風間浦小学校の校長をされていました村上先生から話題提供をよろしくお願いいたします。

村上：風間浦小学校校長として初めて交流事業に同行し、同志社中学校、同

志社小学校を見学した時の感想です。残念ながらその時は大雨による臨時休校で、児童生徒たちの授業や教育活動に取り組む姿は見ることはできなかったのですが、先生方が熱心に授業や諸活動の打ち合わせをしている光景を見ることができ、大変感銘を受けました。そのことを小学校の副校長に話したら、「今日は臨時休校ですからねえ。だから生き生きしているのところがいますか～」と言って笑いを誘いましたが、恐るべし同志社小学校と感じました。

また、同志社中学校生徒会が生徒会交流のために来村した際、小学校の校舎見学のために来校した時、生徒と話す機会がありました。その時に感心したのは、同志社中生の受け答えのはやさで話す内容の豊かさでした。とにかく、反応がすごかった。だから、この生徒たちと近い将来、しっかりと伍していける児童（どんな時でも、どんな場でも自分の言葉で表現し、伝えられる子）を育てねばと思いました。

現教育長として風間浦村で12年間、学校教育に携わり、その間、越膳前教育長、そして竹山先生はじめ同志社中学校の先生方と関わりを持つことができ、さらに教育長としてこの場にいることを思うと、よっぽどのご縁に導かれたのだとつくづく思います。

まずもって、学校法人同志社が種を蒔き、越膳前教育長はじめ、風間浦村が水をやり、そして双方が大切に育ててくれたお陰で、すばらしい価値を付加させながら交流30周年を迎え、現在に至っています。

昨年、第二期風間浦村教育大綱を策定しましたが、学校教育の重点事項の1つに、「ふるさと風間浦村への愛着と誇りを育む教育」を掲げ、具体的な内容として、同志社交流のもつ意義や交流を通して子どもたちに培うべき能力をしっかりと示しました。

その1つは、中学校においては、同志社交流事業を通して風間浦村でしかない学びに感謝し、郷土への愛着心を育成すること。

もう1つは、小学校、中学校で風間浦村とゆかりのある「新島襄」（同志社創立者）の足跡を通して歴史的なつながりを理解し、郷土愛の醸成を図ることです。

要は、「新島襄寄港記念碑」を建立するに当たり、記念碑の建立に強い決

意を持って携わった村の方々の想いを、当時、企画財政課長だった越膳前教育長は「子どもたちに、この村に生まれたことを誇りに思える何かを創ってあげたかった」と述べていました。

子どもたちが、この村に生まれたことを誇りに思う「何か」とは、まさに「新島襄寄港記念碑」であり、「同志社交流」だと思います。特に京都を訪問しての同志社交流は、本州最北の村の子どもたちに知的好奇心や学ぶ事への憧れを抱かせてくれるとともに、「すばらしい生き方との出会い」が生まれる交流だと確信しています。

現教育長として、これからも同志社交流を通して、お互いの絆が強固にそして深化していくことを応援します。

竹山：ありがとうございます。それでは、風間浦中学校の石川校長先生から、中学生の交流ニュースや、しばらく休止されている同志社大学留学生交流などについて、話題提供していただければと思います。よろしくお願いいたします。

石川：風間浦中学校校長の石川です。よろしくお願いします。

私の方から本校生徒の同志社訪問、それから2つ目は函館市での本校生徒の職場体験学習、そして同志社中学校との交流の3つについて簡単に説明させていただきます。

まず1つ目の、本校生徒の同志社訪問についてです。毎年10月下旬に本校2年生全員で、京都の学校法人同志社を訪問させていただいています。コロナ禍でオンラインでの交流が2年間続きましたが、今年度3年ぶりの訪問ということで実施できました。費用については全額、風間浦村教育委員会に負担していただいております。大変ありがたいことです。ありがとうございます。

空路で大阪を経由して京都に移動して、2022年度は同志社大学の今出川キャンパスを訪問させていただきました。八田総長の講話や、キャンパス内の歴史的建造物を実際に間近で見学をしました。また、京田辺キャンパスでは、生徒たちが最新の実験器具に触るという、なかなかない貴重な体験もできました。

続きまして、函館市で、本校生徒が職場体験を実施しております。これは2017年度から実施していますが、毎年8月下旬に2泊3日の予定で実施しています。青森県内の中学生は、大体どの学校でも職場体験学習を実施していますが、主に2年生が2日程度で実施しています。本校はそれを宿泊して3日間という形で、かなり力を入れて取り組んでおります。その場所も以前は近隣のむつ市内とかであったんですが、本村から函館市が非常に地理的に近いということで、車で10分ほど行くと大間町がありまして、そこからフェリーで90分ほど移動すると、函館に着きます。本村から県庁所在地の青森市まで行くよりも近いということで、現地に行って、新島襄について学ぶ良い機会になっております。

初日、いろんな場所を巡って新島襄について、1、2年生が実際にその場で学ぶ機会となっております。村教育委員会から1泊分宿泊費を補助していただいております。ありがたいことです。また、職場体験学習は3日目の午前中で終わっているんですけども、午後からは、五稜郭公園にて、ここは観光客がたくさん訪れる函館市有数の場所なんですけども、そこで風間浦村のPR活動を実施しております。

今年も地元のヒバであるとか、子どもたちのオリジナルのパフレットを多くの方に手渡しすることができました。中には、さいたま市から車で北海道旅行してきた方にお渡しした後に、1ヶ月ほど経ってから北海道1周して、地元に戻られてから、「とてもヒバのいい香りがして、風間浦に行ってみたくなった」ということで、子どもたちに地元のお菓子をお礼に送っていただいたということもありました。村を離れて郷土を見直す、非常に良い機会となったと思っております。

3つ目ですけども、同志社中学校の生徒との交流会ということで、現地を訪れて同志社中学校を訪問しての交流も今年度できました。本校伝統の風中ソーランというのを披露して、今年はオンラインで各教室に同志社の方で配信していただきました。また、生徒会のメンバーとの交流活動もできました。同志社の風間浦ルームを見学して、本校の2年生女子のお母さんが中学校の時に、同志社を訪問した際の写真を発見したということで、この交流30周年の歴史というのを感じました。

1 月には同志社中学校の生徒会メンバーが本村を訪問して、子どもたちとの交流ができております。非常にその重要性、長期的な意義を十分に私自身も感じる事ができました。この絆を未来につなげていくという使命を、私たち教職員が感じる機会となりました。簡単ですが以上です。

竹山：どうも、ありがとうございました。風間浦中学校の生徒たちも今年は 3 年ぶりに来ることができましたし、本校の生徒会の子たちも行くことができて交流を進められているところです。今、石川校長先生のお話がありました風間浦中学校にも、同志社の風間浦ルームのような立派なものがあります。毎年、風間浦中学校の方から、記念品をいただいて、本当に感謝しています。ありがとうございます。

それでは、続きまして風間浦と同志社とをつなぐ方々ということで、お一人目は同志社校友会の青森県支部長の佐藤さんをお願いしたんですが、昨日からインフルエンザにかかれたということで、残念ですがご参加できないということでした。予定にありましたのでご紹介させていただきました。

2 人目は、同志社中学校の出身で北海道大学で学ばれ、海鳥の研究をされた平田さん。風間浦をフィールドに研究され、むつ市のジオパークの専門員をされた後、今、千葉県の県立中央博物館の研究員をされています。今日は研究でトカラ列島に行っておられるのですが、オンラインで参加していただいて、同志社と風間浦との交流について紹介していただければと思います。その後に、先ほどの村長の話もありました、今年初めて同志社大学に風間浦村から入学された駒嶺さんにお話ししていただきます。

それでは平田さん、よろしくお願いします。

平田：皆さん、こんにちは、今ご紹介にあずかりました、千葉県立中央博物館で研究員をしています平田和彦と申します。よろしくお願いします。今日は素敵なこのような場にお招きをいただきまして、本当に感謝しております。

私は 2001 年度に同志社中学校を卒業しまして、2004 年度に同志社高校を卒業いたしました。大学は、その後北海道の方に行ったんですけども、同志社では中三のときにちょうど交流 10 周年の節目に当たる学年でしたので、

風間浦との交流はとても印象に残っています。実際に、卒業アルバムにも風間浦中の皆さんと交流したページが残っていますし、また先ほど映像でも流れておりましたが、風間浦中学校の同志社の展示室に行くと、僕らの時代、同級生と一緒に作ったとても大きな旗が展示されていて、いつも行くとても懐かしく感じています。

その後、やっぱり風間浦という場所は特徴的な地名ですのでとても印象に残っていたわけなんです。私が進んだのが北海道大学の水産学部でして、海鳥の研究をしたくて行ったんですけども、この水産学部というのがなんと函館市にありまして、新島襄と関わりのある場所でうれしいなと思ったのを覚えております。

その後、北海道だけでなく下北半島の方に調査地を移しまして、大学院の博士課程のときに、風間浦村の隣の大間町、そして風間浦村を中心に調査地とさせていただきまして、実際大間町とそして風間浦村に住ませていただくことになりました。その際には、もう本当に当時の役場の方や、今日も来ていらっしゃる越膳前教育長や富岡村長に、大変お世話になりました。ありがとうございます。とても同志社の卒業生ということで大切にしていたことに、本当に感謝しております。

その後、大変お世話になった方が多かった下北で、その豊かな自然と美味しい食、それから気持ちの良い温泉、これを新島襄先生も一緒にこの温泉の気持ちよさを感じていらっしゃったということを、いつも感じながら入らせていただいていた。そして温かい人々に惚れ込みまして、下北に何とか住んで恩返しできたら嬉しいなと専門を生かしていけたら嬉しいなと思っていたときに、そのむつ市役所に当時下北の風間浦村も一緒に取り組んでおりました、下北ジオパークの専門員という形で就職をいたしまして、その際には石川先生にもとてもお世話になりました。本当にご無沙汰しております。ありがとうございました。

その後、ご縁があって今、千葉にいるわけなんですけれども、下北を離れる、風間浦を離れるということはとても悔しかったし、とても残念であった一方で、今でもこのようにして、地域の外から、風間浦村に関わったり、恩返しができるような機会を与えていただけるのはありがたく思っております。

す。今は風間浦村のふるさと大使にも選んでいただきまして、そのような形で機会をいただけていることに感謝しております。

一言、同志社側の人間から見た風間浦と、そして風間浦の側から見た同志社に対する見方を持っている人間として思うこととしまして、風間浦村の方がこんなに同志社のことを大切にしてくださっているという気持ちを感じるにつけ、同志社というものを誇りに思うということが一つ大きくあります。一方で風間浦の側に立ってみたときに、同志社というところがきっかけになって、風間浦は本州の端っこにある村ですけれども、遠く離れた地域や人とつながるきっかけがたくさんあるということが、とてもありがたいなと思っています。本当に、同志社の先生方、そして風間浦村の皆さんに心から感謝申し上げます。これからも、このように関われる機会があったらうれしいなと思っています。今日は本当にありがとうございます。

竹山：どうもありがとうございました。同志社と風間浦での生活の両方を体験した方ということで、また後ほど交流のときに、少し何か思い出など語っていただけたと思います。

それではお待たせしました。風間浦村から初めて同志社大学に入学された、今年の入学生の駒嶺さんです。聞こえていますか。

駒嶺：はい、聞こえています。

竹山：駒嶺さんも昔、中学 2 年生のときに同志社交流に参加したんですね？

駒嶺：はい。そうですね。

竹山：交流や 30 周年のあいさつについて、また今思っていることなど、大学一年生をちょうど終えられているので、ご自由にお話ししていただけたらと思いますので、よろしくお願いいたします。

駒嶺：お願いします。まずはこのような機会に参加させていただき、本当にありがとうございます。僕は中学校 2 年生の時に初めて同志社の方に行って、同志社中学生、高校生の様子、大学生の様子がどんなものか、どんな授業が行われているかなどを、見ました。いろんなことで一緒に関わったり、一緒に活動していく中で一番思ったのは、本当に自立しているなということでした。同志社中学生の 1 つ上の学年の人と触れ合ったんですけど、先生

がいなくても自分たちで、生徒会だけで物事を進めていったり、そういう自立した行動や、そういうところを見て、同志社はすごいなというのを改めて感じて、そこから同志社を目指したという感じになります。そして、中学生ぐらいから同志社大学を目指し始めて、高校で学んでちゃんと大学に合格して、それはもう嬉しくて、いろんな人と支え合いながら助けられたなというのを一番感じています。

中学校2年生のときに、僕は生徒会長をやっていたんですけど、ソーランとか合唱というのをチャペルで披露したんですけど、みんな真剣な眼差しで聞いてくれていました。同志社の生徒はいい人で気さくだし、フレンドリーで、めっちゃいいとこばかりあって、本当に自分も同じ中学生ながら学ぶところがたくさんありました。同志社との関係というのがこれまで続いて本当によかったなと思います。実際、当時一緒に関わった同志社の生徒とは同志社大学生になり、同志社大学に入って今でも交流がまだあります。一緒に同じ部活動に入って活動したり、一緒に遊びに行ったり、ご飯を食べたり、今でも当時の出会いがあったからこそつながりというのがあり、本当に何か自分の中ではすごく縁のあるものだなって感じていて、これからもそういうつながりを大切にしていきたいなと感じました。

自分が初めての同志社大学生で、風間浦から出た最初の1人ということなんですけど、自分を筆頭にというわけじゃないですが、どんどん風間浦から同志社大学に来てもらって、反対に同志社大学の人が青森の方に行って、またつながりをより強固なものにしていけたらなと思っています。その中で自分がその1人として、つなぎ役という役目をいろんなところで果たして、今は30周年ですが、それを40年、50年、100年というように、できるだけどんどん長くして、つながりをどんどん大きくしていけたらよいと思います。

今日はお招きいただきありがとうございます。

竹山：風間浦出身の初めての同志社大学生、駒嶺鍊さん、ありがとうございました。

同志社大学に中学校2年生のときに同志社交流で来られて目指されたということですが、高校の進路選択時、東京の方の大学や北海道大学ではなく、

同志社大学という選択は、いつ頃最後決められたんですか。

駒嶺：本当に高校を選んで決めたのも、同志社大学に入学している人がいるかという視点で決めていて、何校か候補はあったのですが、その中で一番、自分は野球もやっていたので、その野球の部活と勉強を両立できるような環境はどこかなというのを探していきました。しかもそれに加えて同志社大学に入学している人が実際何人おられるか、つまり、同志社大学に合格している実績がある高校を選んでいきました。ですので、東京の大学などは考えに入れず、もう本当に中学生のときに同志社大学を目指し始めて、そこからもうずっとその同志社大学 1 本で、高校受験、合格後の高校生活も歩んできました。

竹山：そうなんですか。高校はどちらでしたか。青森市内の高校でしたでしょうか。

駒嶺：青森市内の高校です。

竹山：それではまた、後ほど交流させていただければと思います。

駒嶺：ありがとうございます。

竹山：それでは次に風間浦で 30 周年の記念の講演をされた本井先生に、同志社側からの話題提供をお願いしたいと思います。

本井：では、同志社サイドからの情報提供です。本井康博と申します。今日は風間浦村の関係者の方々、オンラインで特別参加して下さり、ありがとうございます。資料（レジュメ）を出すべきところなのですが、実は、去年、風間浦村で披露した記念講演の要旨は 2023 月 4 月に出る『同志社時報』第 155 号に「特別寄稿」として出ますので、今日は資料を出すのを控えしました。同誌は村には 40 部お送りしますので、関係者や風中の生徒の皆さまはそれをご覧ください。で、今日は資料なしの口頭だけでお話しさせていただきます。

まず、同志社側の消息としてお伝えしたいのは、風間浦に新島の碑が建つまでの動きです。最初は久永省一^{せいいち}という同志社の教員が、東北紀行の中で風間浦に行った話を書いております。これがおそらく同志社における風間浦村デビューだと思います。実は私は、同志社高校でこの先生から英語を習った

んですけど、私の卒業後に同志社中学校に移られて校長になりました。だから、直接に風間浦の話を書くチャンスはありませんでした。ですが、新島研究家として風間浦を同志社に紹介された功績は大です。

2人目の功労者は、河野仁昭氏。今の同志社社史資料センターが同志社社史資料室と言われた時代の室長でした。なんでこれほど風間浦に一生懸命になるんやろか、と不思議に思うぐらいに熱心でした。とりわけ同志社大学の留学生たちを連れて、ほとんど毎年のように村を訪ね、地元の小中学生と交流させています。都合10回ぐらい行かれたかね。今もそういう交流は続いているようです。

この室長が定年退職されて、資料室が大変困っている時に穴埋めのために私がバイト(週15時間の)で呼ばれました。つまり河野氏は職場的には私の元上司なんです。

ということで、私の恩師や上司が風間浦に特別な関心を払っていましたから、私はその後を継がなきゃいけないというプレッシャー、あるいはちょっとした使命感があって現在に至っております。

こういった流れの中で、青森県出身あるいは在住の同志社卒業生たち(同志社校友会青森県支部)が風間浦の一件を知り、村に新島襄が寄港した記念碑を建てよう、建ててもらおうと動かれました。それに対して、地元の方は同志社とか新島襄に関してはほぼ白紙状態ですから、最初は何が何だか分からないという状況でした。それでも、卒業生は押しの一手で粘り勝ちをしました。村役場や議会の方々の支援や理解をとりつけることに成功し、31年前に記念碑が建ったというわけです。

うれしいですね。ですが、私など碑が出来ても下北半島は遠いですから、京都からなかなか行けませんでした。やっと18年前に視察が実現しました。調査のために一人で行きました。役場や村の人など誰にも告げずに、です。函館経由で下北に入って現場にたどり着き、初めて記念碑と対面しました。こういうところに碑が建っているのか、と少々びっくりいたしました。

その後、公式出張で行ったのが11年前の2012年です。交流20周年を記念する講演をさせていただきました。この年は、ちょうど翌年に大河ドラマ「八重の桜」が放映されるという時期でしたから、新島襄だけではすまされ

ません。あちこちで「八重^{と なみ}って誰や」という疑問が渦巻いていましたので、八重のこと、さらには斗南藩の話も織り交ぜて講演をしました。そして昨年、30 周年という節目の年に 10 年ぶりに再度、来てほしいということで記念講演をさせていただきました。こういう流れの中でこんにちに至っております。

お隣りにおられる竹山幸男副校長（同志社中学校）は、風間浦村の「ふるさと大使」4 人のうちの 1 人ですが、私も陰のサポーターとして同志社と風間浦村のつながりに注目し、できることはやりたいと考えております。

たとえば、基礎的なデータの確認です。同志社では新島襄の風間浦寄港に関するデータに混乱が生じています。不正確なんですね。新島襄が風間浦村に入港した日についてブレがあります。私の恩師の久永先生は、元治元年 4 月 18 日と 19 日に新島先生は風間浦に泊まって風呂に入ったとされました。その後、社史資料室の松井^{あきら}全氏という職員が、『同志社歳時記』中の 1975 年 4 月 19 日の所で風間浦の紹介をしています。これは、危ないですね。取り扱い注意です。

どういうことかと申しますと、正解は元治元年 4 月 18 日と 20 日です。つまり、久永氏は半分正解、松井氏は誤答です。品川を出港した快風丸が 18 日から 20 日まで風間浦村の沖合に停泊^{し も ふろ}したのは事実です。都合 2 泊 3 日です。そのうち新島が上陸して下風呂温泉に浸^{つか}ったのは初日と 3 日目です。中日^{なかび}の 19 日は終日、沖合の船上^{おか}にいて、陸には上がっておりません。上陸した日を細かく言えば、18 日、村の沖合に着いた日にすぐ温泉に入る。その 2 日後、函館に行くという朝にもう 1 回、上陸して入浴しています。だから 2 回です。

もうひとつの混乱は、年代です。新島が風間浦に最初に上陸したのは元治元年 4 月 18 日、西暦になおすと 1864 年 5 月 23 日になります。ところが、元治元年だけを西暦に換算して 1864 年 4 月 18 日とする場合が、多々あります。年号を西暦にするんだったら、月日も西暦にしなければいけません。新暦と旧暦ではおよそひと月違いますから、注意が肝要です。それで、2 度目の上陸は旧暦では 4 月 20 日、新暦では 5 月 25 日になります。

従って、松井氏が現在のカレンダーの 4 月 19 日に風間浦の一件を入れる

のは、二重のミスを犯すことになります。旧暦と新暦の使い分け、これが大変面倒だっていることをここで指摘しておきたいと思います。

さらに久永氏の紀行文で困るのは、新島は温泉宿に泊まったことになっています。泊まってはいません。沖合に停泊した快風丸から新島は、2度にわたって温泉に「通う」わけです。宿泊はいずれも船内です。船で2泊した点は、注意すべきです。

それにしても、風間浦に碑ができたというのは、考えれば考えるほど不思議ですね。公平に言いますと、風間浦にできるんだったら、他のところでできて当然です。ところが、なぜか風間浦だけなのです。

新島は船が好きですから、生涯で世界一周旅行を2回経験しています。もちろん、国内でも北海道から薩摩まで、わりとくまなく回っています。だから、新島が寄港した港は正確に数えたことがありませんが、何十とありますね。ですが、寄港碑が建っているのは、風間浦だけなんです。「なんでや」と言われかねません。

早い話が、快風丸は品川から函館に行く間だけでも数か所に寄港しております。そのうち、一番日数が短いのが風間浦です。しかも、上陸はしていますが、宿泊していません。船に戻っています。つまり、船から2回、風呂に入るために通っただけで、碑が建つんです。それだったら、例えば岩手県の宮古なんか7日間、上陸して旅館に泊まっているんですよ。私は何年か前に、2泊3日で調査に行ったことがあります。それ以前も、以後も碑はありません。

それから、寄港ではなくて温泉に入ったから碑が建つんだったら、他の温泉はかわいそうですよ。新島の身分は宣教師ですから、同僚のアメリカ人宣教師と同じように夏はなるべく避暑をします。温泉場での避暑だけを取り上げてみても、東北では山形の高湯温泉。1か月以上、滞在しています。それから出身地の上州では、伊香保温泉。ある夏などやはり1か月、入浴しています。外国の例を挙げると、ドイツのヴィースバーデンやニューヨーク州のクリフトン・スプリングスといった温泉地。両方ともかなり長期にわたって保養と養生に努めています。

それに比べると、本州最北端の港、温泉とはいえ、船から2回通って入っ

たと短期滞在なのに碑が建っている。なんでなのでしょうかね。

一つは、やはり地元の理解があったからでしょう。本学卒業生のプッシュ（Push）の力もありますけども、村の方々のプル（Pull）、引っ張ってくださる力、これがすごかったのでしょうか。この点は横浜と比べると、よく分かります。出国した函館に渡航碑（出国碑）があるんですから、10 年後に戻った横浜にも碑があっても良さそうですね。そこで、同志社校友会神奈川県支部は、一時、熱心に運動しました。場所はだいたい分かっていますから、下船した現場に帰国記念碑を建てたいと一生懸命、横浜市にアピールしました。許可はおりませんでした。

で、港に植わっている記念樹の桜の木が、たまたま 1 本枯れたんです。その代わりとして植えるんだったら OK しよう、ということになりました。支部としては、新島ゆかりのカタルパの樹を植えたかったのですが、やむをえません。しかも、同志社の名前を前面に出さないで、といった厳しい制約がありました。今はどうなっているか知りませんが、当時は新島ファンが個人的に建てたみたいで、そんな説明板でお茶を濁されました。

私は大谷實同志社総長と一緒に式典にも参加しましたが、横浜市は冷たいなという印象を受けてしまいました。いまだに帰国碑は横浜港には建っていません。

それを想うと、函館や風間浦に立派な碑が建っているのは、スゴイことです。さらに、風間浦がユニークなのは、碑が単品（1 本）ではなくて、コラボというか相方がいる、つまり 2 本の碑がセットのように建っている大変珍しいケースだからです。具体的に言えば、海峡を挟んで 2 本、新島ゆかりの碑が向かい合って建っているのはここだけです。函館の渡航碑プラス風間浦の寄港碑。この 2 本をセットで考えたい、というのが私案です。

コラボの相方は、実は下北にもいます。しかもごく近くにです。寄港碑が建っている「海峡いさりび公園」というあの狭い地域に、もう 1 本、新島ゆかりの碑が建っています。これも、風間浦だけの特色です。

要するに、新島関連の碑が狭い公園に 2 本建っている。寄港碑の相方とは、ここで『海峡』のシメを書き上げた井上靖の文学碑がそれです。確か 1989 年の建立でしたね。それからわずか 3 年後に、この碑のすぐ近くに新

島の寄港碑が建ちました。

両者とも建てるときにはコラボなんて発想はなかったと思うんですね。しかし、建ったものを見ると、二つの記念碑はさながらコラボしていると考えたいですね。井上靖の文学碑は、一見して同志社や新島とまったく関係ないみたいですが、どうしてどうして、なかなか興味深い関係が潜んでいます。

どういうことかと申しますと、井上靖夫人の井上ふみは同女（女専時代の）の出身なんです。ここが大事です。このふみさんから見ると、夫の文学碑がまず建った。その3年後には、今度は自分が学んだ女学校の元校長の碑が、そのすぐそばに出現した。そういう意味で、ふみさんは、いさりび公園にあるふたつの碑を赤い糸で結んでいる方なんです。

井上ふみは、私が育ち、今も住んでいる京大近くで生まれました。お父さんは足立文太郎といって解剖学が専門の京大医学部教授です。長女には自分の名前の一字（文）をとって「ふみ」と名づけました。

足立家は吉田山の近くに住んでいました。ふみは、私が卒業した小学校の隣の学区にある第二錦林小学校を出ました。その後、同女（今でいうと同志社女子中高）に進学しました。だから、私の住んでいる近くを通して登校されたんだろうなと思います。

実は井上家と足立家は親戚でした。それで、井上靖が京大に受かって金沢から京都にくると、井上家の近くの下宿を構えます。しかし、彼は京大にはほとんど通わずに、足立家に入り浸りの生活を送ります。そんなことから、靖とふみは自然と知り合って、やがて結婚します。靖は学生結婚です。ということですから、夫妻は京都とはきわめてゆかりの深いカップルなんです。地縁的に見て、私とも不思議なつながりがある夫婦だなと思います。

井上靖という人は、家庭ではびっくりするぐらいの暴君だったようです。寝起きの気分が悪いと、朝食のちゃぶ台をひっくり返す。「こんなもん食えるかっ」と怒鳴りながら。子どもたちもこういう旦那と付き合う妻は大変だろうなと母親に同情的です。だから娘などは、結婚するんだったらお父さんと全く違う人、ということを書き残しています。そういう難しい人だったらしいんですが、とにかく京大生と同女出身者というゴールデンカップルです。だから私的には大変関係の深い夫妻なんですね。

今日は児玉実英先生さねひでが参加されていますので、秘話を紹介します。先生はかつては同志社女子大学の教授で、しかも最後は学長をおやりになりました。この先生から伺った井上夫妻の秘話です。

ある年の国際ペン大会が京都で開かれたときに、井上夫妻は一緒に参加され、国際ペン大会役員の児玉先生とも会う機会がありました。足が不自由なために椅子に腰かけていたふみを指さして、井上靖は児玉先生に、「こいつは女専卒や」とおっしゃったとか。「女専卒」とは不正確です。女専というのは、同志社女子大が認められる以前、女子専門学校という名前で呼ばれていた時代の校名です。実質的には今の同志社女子大です。

彼女は体が不自由でしたから、病気のために女専を中退しました。今風に言えば、同志社女子高卒で同志社女子大中退、となります。靖本人はアバウトに、「妻は女専を出てる」というふうに理解していたようです。いずれにせよ、井上ふみは学歴的には私にうんと近い存在ということになります。

私的なつながりはこれくらいにして、碑の話に戻ります。井上夫妻は文学碑の建設のために 1989 年に風間浦に 2 度、足を運ばれたそうです。2 度目は文学碑の除幕式のためです。この時にはすでに水面下で新島の寄港碑建設の話が進められていただろうと思います。それからわずか 3 年後に、すぐ近くに寄港碑が作られたんですから。寄港碑の竣工を知った時、井上夫人はハッピーな気持ちになられたのではないだろうか、と推測します。

以上の関連から、同志社と風間浦村は今日、連携協力に関する包括協定というのを結びました。こういう例があるのだったら、他にも結ぶ市町村があってもよさそう、と皆さまも思いでしょうね。例えば函館市や安中市、会津若松市、大磯町、高梁市（岡山県）、熊本市などなど。

ところが、安中市ともまだ結んでないんですよ。で、先取りして言いますと、今年の夏に結ぶことになりました。2023 年の 7 月 17 日です。風間浦よりもずいぶん遅れましたね。天下の安中が、です。風呂に 2 度入ったという風間浦よりも、なぜこんなに遅れるのかと言われそうです。この差は一体どこにあるのかということになります。私は安中の記念講演に呼ばれていますから、そうした疑問も無視できません。

最後に PR を一件。風間浦でも言ったんですけども、私は新島襄生誕記念

懸賞論文の審査員をもう何十年もやっております。だから、風中の皆さん、どんどん応募してくださいと言って、私が出した 30 冊余りの新島本の中から中学生向きの本を含めて 20 冊を選んで置いてきました。

京都に帰ってから審査がありました。そしたら、3 年生の五十洲^{いそす}ひなたさんが佳作に入選されました。パチパチですね。私が去年、風中に行ってびっくりしたのは、校長室と職員室の廊下に、かつての入賞作品がいくつも貼ってあるんです。これまでに 2 回、最優秀賞を風間浦の生徒が取っています。それ以外のものも貼ってありました。だから、今回のこの五十洲さんの作品も、貼り出されるでしょうね。

とにかく、安中の新島学園同様、風中は新島懸賞論文を毎年出してください。これには先生方の指導もあるでしょうが、生徒や親御さんの協力も不可欠でしょうね。今後とも新島懸賞論文を引き続き送っていただければうれしいです、というお願いを最後にして私の話を終わります。ご清聴、ありがとうございます。

竹山：どうもありがとうございました。それでは、後の 5 分ぐらいでまとめに入りたいと思います。風間浦と同志社から話題提供していただきました。本井先生の方からあった、日本、世界の新島先生寄港地の他の場所に碑がなく、風間浦村下風呂だけにあるのは地元の理解やものすごく Pull の力（引っ張る力）があったこと。井上靖先生やふみさんのお話が出ていたので、越膳さん、せっかくでするのでその辺の話で少し紹介できることがあれば、追加をお願いします。

越膳：井上靖の文学碑を先ほど紹介したんですが、全国にあるんですけども、ほとんど有名なものは彫刻家の舟越保武先生が設計されました。その舟越保武の奥さまが、続の流れといいますか、福士卯之吉、いわゆる続卯之吉の系統だということが、先ほど、コラボという話をされたんですけども、私は面白いなと思っています。

竹山：最初、碑ができるときは、地元の方の理解はあまりなかったんですよね。

越膳：もう全然、こういうことを言っちゃ駄目なんでしょうが、井上靖のと

きにも大変でしたので。

竹山：越膳さんは、そのころは財政企画課長をされていて、当時の小野村長とともに実現に向けて頑張られたと聞いています。

越膳：それで、最終的には議会で、わずかの差で予算が成立したんですけれども、いろいろなことがありましたが、建立できました。

竹山：そういうこともありながら今日に至っているんですね。

越膳：新島襄のときには、議会の皆さんを、まずは京都に行ってもらって、同志社というのを見てもらいました。そういうことで、割と井上靖の文学碑よりは、今、考えればすんなりと建立が決まったのかなと思っています。

竹山：ありがとうございます。先ほど本井先生の話の中で新島襄生誕記念懸賞論文の話が出ていましたけれど、石川校長先生、今年も生徒たちは、やっぱり風間浦中学校の先生の指導のもとに頑張られてということですね。函館の体験学習にも行かれたということで、何か付け加えてお話し下さることはありますでしょうか。

石川：本校で先ほども説明しましたが、1年生と2年生で函館に行って、新島襄の海外渡航、出発点のところを見て学んで、2年生で同志社を訪問させていただいて、交流をして、そして3年生が最後の集大成ということで、懸賞論文に応募するという3年かけての学習ということをやっています。その成果として今年度、五十洲ひなたさんが佳作に入賞して、先月、同志社を訪問して表彰式に参加してきたということで、戻ってきてから、村上教育長への報告もそうですけども、全校集会でも、後輩たちに懸賞論文についての報告もして、後輩に引き継いで、受け継がれていくというのがこの懸賞論文への応募ということになっております。

竹山：以前は函館研修もなく、少しずつプログラムを加えながら行われていますね。成田校長先生、越膳前教育長のころに同志社中学校との授業交流、ICT教育交流なども始まったと思います。駒嶺さんの中学生の頃は、函館研修（職場体験のほかにも、函館みらい大学、新島先生渡航碑、函館千歳教会での遺髪なども訪ねられる研修です）はどうでしたか。

駒嶺：いや、ありました。

竹山：もう、あったんですね。

駒嶺：自分が中学校2年生のときに、初めて。そこから、函館研修というのが始まります。

竹山：懸賞論文は大学生も募集しているので、駒嶺さんもぜひまた応募していただけたらと思います。あと風中生に同志社大学の話などをしていただけると、同志社大学をめざす方が本当に出てくるのではないかな、と、今日、聞いていて思ったりしていました。

平田さん、せっくなので風間浦村でのエピソードなど紹介できることがありますか。

平田：ありがとうございます。本井先生のご講演で結構井上靖の文学碑とセットになっているところの価値をたくさん聞かせていただいて、そこを新しくまた見出すことができました。井上靖の文学碑の方は、アカエリヒレアシギという海鳥の詩が書かれていますが、井上靖が小説『海峡』を書いている中で、最後に海鳥の鳴き声を主人公が聞きに行く舞台として風間浦を選んだわけなんです。私も海鳥の生息地という視点で風間浦に魅かれてやってきたという点で、とても並々ならないご縁を感じております。

旭川に井上靖の記念館がありますけど、そちらで、2019年の3月16日だったかと思いますが、その『海峡』という小説の企画展が開催されている中で、ギャラリートークに越膳先生と私がお招きいただきまして、お話しさせていただいたようなご縁もありました。

そういったところで、海鳥という視点で風間浦に魅かれた人間として、また同志社と函館と風間浦を結ぶ人間というところで、竹山先生とも一緒にふるさと大使という部分を大切にしながら、これからも風間浦に、同志社に恩返しをしていければと思っています。今日も鹿児島県トカラ列島に研究調査のために訪問していますけども、必ず名刺、ふるさと大使の名刺を携行させていただいています。このお話を先方で披露できることが私にとってもとても喜びですし、これからもそういう活動を推進していきたいと思っています。

竹山：聞いておられる方からのご質問など特にございますでしょうか。どなたかありますか。大鉢先生はずっと新島懸賞論文の審査を本井先生や私と一緒にいただけていますが、風間浦に行かれたことはありますか。

大鉢：20 周年のときは行きましたけれども、それからはちょっと行けておらず申し訳ありません。

竹山：富岡村長はおっしゃっていた通り、村長になられる前は教育委員会に勤務されていましたが、同志社を訪問されたときの印象などそのときの思い出などありますか。

富岡：初めて行ったのが 20 周年の交流の前の年で、越膳教育長や若い職員何人かで行って、とにかくでっかい学校だなと思って帰ってきましたし、京都のど真ん中であって大変感動して帰ってきた思い出があります。そして先ほども申しましたが、まさか自分が村長になってこうしてまた皆さんと交流できるとは、ゆめゆめ思っていませんでしたが、大変ご縁があるなと思っております。

新島先生は、たった 2 日間の上陸ということで、先生の人生の中では薄い部分、本当にちょっとした関わりしかないんですけれども、こうやって交流できているすごさを今日また改めて感じた次第です。ありがとうございます。

本井：追加事項が一件あります。特に同志社の側の人は記念植樹のことを特に覚えてください。風間浦村は、林業が盛んな村ですから、青森ヒバを村の木にされています。その青森ヒバが同志社に 2 本植えられています。

もう 30 年ぐらい前でしょうか。同志社の田辺キャンパスがオープンした直後に、青森ヒバが 1 本、植えられました。私は、先々月に行って久しぶりに記念樹を探したんですけど、プレートがなくなっていましたので、確認できませんでした。それで京田辺の施設課に頼んで探してもらったら、写真が 1 枚来ました。

場所は、恵道館の角です。と言っても恵道館を知る人は少数ですから、別の建物でいいですよと、理化学館の前です。もう一か所は、同じく青森ヒバが岩倉キャンパスのチャペル（宿志館）の東側にも植えてあります。こちらはちゃんとプレートがありますから、すぐ分かります。

一方、同志社側は、寄港碑建立 20 周年記念としてカタルパの木を風間浦村に寄贈しております。たまたま私も 20 周年の記念講演で呼ばれていたから、植樹式のことを覚えています。今も元気に育っているようです。

要するに、同志社から風間浦村へはカタルパが行き、風間浦村から同志社へは青森ヒバが2本、来ています。相互に記念植樹を行うというのも他の村や町にはないイベントです。

以上、同志社サイドからの追加情報提供でした。

竹山：それでは、30年を振り返るということで、この短時間では振り返りきれないところもまだまだいっぱいあるのですが、お忙しい中、皆さんご参加いただいて、30年間の交流について振り返るひとときを持たれたことを感謝しております。

最後に報告者としてお話しいただいた方々に感謝の拍手をおおくりしたいと思いますので、よろしくお願いいたします。ご報告者の皆様、ありがとうございました。

（2023年3月13日（月）開催）